

BATTLE BALLER

HARUKA

II — 3

ケルビム

Ψ

(Eternity Flame)

バトルボーラーはるか

第二集

星間戦争

第3章

ケルビム

作・ Ψ (Eternity Flame)

一翌日。五月に入り、青葉の若々しい色あい鮮やかな町並みも、早朝はまだまだ寒く、散歩を日課とする人々も、中には防寒着を着込んで歩く人もいる。

そんな時間帯の文化の森公園に、汗びっしょりでトレーニングをするはるか達が出た。川を隔て、高台に展(ひら)ける公園は麓(ふもと)からは見えないが、上がってみるとかなりの広さがあり、運動にはもってこいの場所。しかしこの時間には人気もなく、朝の静寂(せいじゃく)にはるかの声が爽やかに響きわたっている。

「そーれッ！」

はるかはfrisbeeを正友と投げ合い、おおよそ修業をしているといった感じには見えない。

「ぬおッ！？このッー！」

しかし、二人の距離は文化の森の広い芝生の公園の端から端までと次第に離れてゆき、その間を真っ直ぐにfrisbeeが飛んでゆくところが普通ではなかった。

「ハアハア...もうヤメにしようぜ！！」

疲れた正友がはるかにそう呼びかけた。

「もーだらしないわねえ...。」

「お前だって息切れしてんじゃねえか！」

二人は自販機でジュースを買い、ベンチで休む事にした。

「うーん。汗かいた後のポカりはたまらんな。」

「もー能天気なんだから...あと十日で、昨日の怪物みたいな達の達と戦うのよ。もっと深刻にならないの!？」

「んな事言ったって、顔をこわばらせながら修業したってしょうがねーだろが！」

「だからってアンタは、のほほんとし過ぎなのよ！」

「なんでそーやってお前は、いちいちオレに絡むんだよッ...ははーん、ひよっとしてお前、オレに褒れてんの？」

「バッカじゃないのーッ。ナルシストもそこまで行くと病気ね！」

「...それはそうと、本当にfrisbeeを投げるのが修業になんのかなあ。」

自分の言いたい事だけ言うと、突然、話題を切り換えた正友。

「アンタねーッ...」

怒ろうとしたはるかだが、人影が見えたので、黙っていた。

「朝の修業は終わったかのオ。」

「鮎吉師匠！？あの...言われたメニューはやったんすけど、これって何の修業なんすか？」

「フオッフオ。まあついて来なさい。」

「ドコ行くんすか？」

「弁天山(べんてんやま)じゃ。道すがら、今の修業の意味を教えよう。」

鮎吉に案内され、三人は弁天山へ高速移動を始めた。

「先の修業じゃが、あれは対宇宙戦用のスピリットアームズ【神統武具】を動かす為の訓練なのじゃ。」

「宇宙戦用ッスか！じゃあ、今から行く弁天山ってトコにそれがあるんすか？」

「うむ。」

「宇宙かあ〜...」

ロボット系のアニメが大好きな正友は、宇宙戦と聞いて、戦闘機的な物を想像し、自分がそれに乗れるのかという期待に瞳を輝かせた。その戦闘機があわよくば可変型(かへがた)の物であって欲しいという願望も加わり、想像を膨らませていると一

「正友！ドコまで行く気じゃ。」

「あっ...と、すみません。」

浮かれ過ぎた正友は、いつの間にか弁天山を行き越し、慌てて踵(きびす)を返した。

「おじいちゃん。スピリットアームズは何処にあるの？」

「まあ、待ちなさい。」

天然に出来た山では日本で最も低い山とされる弁天山(べんてんやま)。この小さな山にある宇宙戦用の物とは、いったい何なのだろうかと、はるかも正友も固唾(かたず)を呑んで鮎吉の行動を見ていた。

「古(いにしえ)より伝わる御霊(みたま)の眷獣(けんじゅう)よ、我が血に応えよ。」

そう言って、鮎吉が弁天山の麓に自分の血を一滴落とすと、山を取り巻く田圃(たんぼ)が真っ二つに割れた。

「これが...宇宙戦用の...!？」

見慣れぬ大きさの金属製の物体に、はるかはド肝を抜かれたようであった。それは正友の期待通りの戦闘機型をしていた。

「うひょー!!これが言ってた[モノ]ツスね?」

「そうじゃ。」

「コレ、どうやって動かすんスか?」

「内力(メキド)じゃ。今朝方の遠投で練習したじゃろ?アレを応用するのじゃ。お主らの力と、このスピリットアームズが上手く融合すれば、凄まじい威力を持つ兵器となる。お主らの意のままに動かす事も可能じゃ。まるで巨大な生物のように空翔ける兵器。それを見た古代人は、畏怖(いふ)と尊敬の念を込め、ケルビム[智天使]と呼び、正義と秩序(ちつじよ)の番人として崇(あが)めておった。」

聖書に有名な預言者を昇天せしめた火の車。あるいはエデンと呼ばれた楽園を守護する門番として、その名を記されているケルビム。それは扱う者のイメージや性格に応じて、その性質や属性を変える物であるとも鮎吉は付け加えた。

「えっ!?じゃあ、この形態から変形したりもできるんスか?」

「もちろんじゃ。」

「そっかー。そりゃあ楽しみだなあ...」

「パーピリオン星人との戦いまで時間がないのじゃから、修業に励(はげ)むのじゃぞ!お主らの力の扱い方次第で、勝敗は決まるのじゃからのオ。」

「そりゃーやりますよー。任せて下さいよ!!」

正友は俄然(がぜん)やる気を出した様子で、そう言って胸を張った。

「ねえ、おじいちゃん。」

「何じゃ?はるか。」

「パーピリオン星人は本当に神様なの?」

浮かれる正友とは対照的に、はるかは戸惑っているようであった。昨晚に見たパーピリオン星人の科学力や、人の心に直接語りかけてくる程のテレパシーの強さに驚いたのが要因で、そうになっていたのである。

はるかは、鮎吉の元で一神教を信奉(しんぽう)していたので、まるで善と悪の心が神の中に混在(こんざい)しているような話に聞こえ、事態を呑み込めてなかったのである。

そこからもたらされる結論と矛盾点(むじゅんてん)に、頭の中はさらに混乱を来たしていた。昨日の話では、神が二人いる節(ふし)に聞こえたのだが、どうもそこが釈然(しやくぜん)としない。

神がかり的な力を持つ自分という存在に対し、その力の基となっている存在が、自らの遊び道具として、自分達を仕立てあげたのだとしたら...

今まで耳にした情報の見方を変えれば、そういう筋書きの話も浮かび上がり、理不尽(りふじん)な筋書きが本当にその通りであるとするなら憤(いきどお)りも感じるし、戦う事に虚(むな)しさも感じる。そんな矛盾(むじゅん)と戸惑(とまど)いが入り混じり、何とも言えない気持ちになっていたのであった。

「あ奴らは神などではないぞよ。」

鮎吉は意外なほど簡単にそう言っただけで済んだ。

「本当...？」

「ああもちろんじゃとも。よくいるじゃろ？ちょっと力や権力を持つと、自分を神格化(しんかく)する奴。あ奴らもその類(たぐい)じゃ。あ奴等とて同じ八大心拳の一派を司(つかさど)るというだけじゃよ。」

「そうなんだ...。」

「ただ、ちょっとだけ頭は良いかも知れんがのオ。まあ、東大に行った奴が、自分は偉いんだと勘違いするようなモンじゃ！ソレが増長して、形のない神と張りあおうとしておる。じゃからお主らが行って、ちょっと頭を冷やしてやるがよい。」

「はははッ。鮎吉師匠って面白いっすね！」

そんな話しをしている内に、三台のケルビム[戦投機]が小さなアクセサリとなり、はるか達三人の元に、それぞれ一つずつテレポートしてきた。

「これは...ケルビム？」

メノラーの刻印が装飾(そうしよく)された花形のペンダントが、光を放ちながら胸元に現れた事に、はるかは驚いていた。

「気に入らんかのオ。」

「いえ、そんな訳じゃあ...」

「気に入らねば、自分の思い次第でどんな物にでも変形するぞよ。」

「あの、コレって何の花なの？」

「ダリアじゃな。」

「ダリアって言うんだ...可愛い。」

「あの一、質問していいツスカ？」

「何じゃ？」

「コレッて、例えば生き物とかにも変身できるんスカね？」

「うむ、できるぞよ。まあしかし、もう少し修業せんとのお。」

「面白れー！超オー頑張ります。」

「ちなみに正友の指輪は、シルバーのホーク[鷹(たか)]じゃ。それぞれ先達(せんだつ)の方々が身に付けていた時の形態をしておるが、お主らの気に入った物に変えるのも良いし、自由じゃ。もちろん戦闘形態も自分達の好きな形にできるぞよ。ただ、どんな物にでもなれるという事は、悪さも出来るという事じゃから、その辺は心して使うようにのお。特に正友は、スケベな事などに使ったら、バチが当たるとっておくが良いぞよ！」

「そんなあ...っんな事しませんよ。」

「まあ冗談はさておき、修業に励(はげ)むがよい。円盤(えんばん)の遠投のコツは擲(つか)めたじゃろから、今度からは色んな方向から曲げたり、旋回(せんかい)させたりするのじゃ。それが内力を自在に扱う能力に繋がるからのお。」

「はい、分っかりやしたーツ!!」

「はるかも、よいな！」

「はい、師匠！」

鮎吉は自らが手にしたケルビムを秀樹に届けると言い、はるか達の元を去った。

「ああ～なんかハシヤギ過ぎて腹へったなあ、何か朝メシ喰おうぜ！」

「そうね。」

「んじゃ行くか！」

「行って来れば？」

「はあ～？お前も行くんだろ？」

「わたしは学校行かなきゃイケないから、アンタだけ行って来なさいよ。」

「お前、ゴールデンウィークで休みじゃねえの？」

「私には、やる事があるの！」

「何があるんだよ？」

「何でアンタにいちいち言わなきゃイケないのよ。関係ないでしょ！」

「んだよッ...まあいいや。」

「それよりアンタ仕事は？」

「ん、今日は夕方からだよ。」

「ところで何の仕事してるのよ？」

「看護師だよ。」

「え〜ッ！？アンタが？」

「何だよ？」

「だって看護師って病人の人のお世話をするのに、アンタに出来るの？」

「ちゃんとやってるよッ！」

「なんかアンタがやると、白衣の天使って言うより、黒衣の悪魔って感じよね。」

「失礼な奴だな...もういい、メシ食いに行こ。」

よほど空腹だったのか。正友は、はるかに言いたい放題に言われながらも朝餉(あさげ)を取る事を優先(ゆうせん)して、何処かに行ってしまった。

はるか自身気付いてはいなかったが、彼女は思春期(ししゅんき)特有の反抗期を迎えていた。まるで子供が、その両親に意味もなくやつ当たりしたり、乱暴(らんぼう)な口ぶりをする時と似た態度で正友に接してしまうのである。

正友のドコか人を食ったような接し方も個性の強い物ではあったが、何もソコまで言う事もないのという程、苛立(いらだ)って怒ってしまう。大らかな鮎吉と、誠実(せいじつ)な秀樹には見せられない棘(とげ)のある感情。

それを正友にぶつける事で、心の均衡(きんこう)をはかっているようであった。両親のいないはるかには、それはある意味、仕方のない衝動(しょうどう)に駆られた末の行動であったのかも知れない。心身の成長のバランスに乱れの生じる年頃。中には自分の心の内でその乱れを矯正(きょうせい)できる者もいるだろうし、またそれを未だにぶつける場所のない同世代の子もいる事であろう。

人それぞれ形に違いや大小の格差はあるが、そんな感情の裏の部分の一端なりとも晒(さら)け出せる相手が見付かったのは、はるかにとっては幸運な事であった。しかし、その有難(ありがた)みに気付くのは、本人には何時になる事であろうか。

「おはよー。待たせてゴメンね...」

「遅いよおーッ！はるか。」

沙織に誘われ、はるかは茶道部(さどうぶ)の主催(しゅさい)する茶会に参加するべく、学校へと急ぎ足で来ていた。沙織は、とにかく新し物好きで、自分の知らない世界にどんどん足を踏み入れていく。飽きっぽいので何をやっても長続きしないという欠点があったが、この茶会だけは美味しい和菓子が出る事もあって、定期的に参加していた。

「私さあ、このお茶会に出るのだけは長続きしてるよねえ。」

「...そうだね。」

「茶道が向いてるのかもお、茶道部へ入っちゃおうかなー。」

「う、うん。いいんじゃないのかなあ...」

何と言ってフォローしていいかわからず、とりあえず頷(うなづ)くはるか。

月に一回程度の間隔(かんかく)が空くからこそ続いているのであって、毎日あるとなると、沙織には無理なんじゃないのかと本当は言いたかったのだが。楽しそうにしている沙織の気分に水を差してもと思い、遠慮(えんりょ)していた。

「お菓子おいしいねー。」

「うん、美味しいね。」

学生同士のざっくばらんな流儀(りゅうぎ)で行う茶会であったので、私語もほどほどになら許されていたのも沙織には親しみが持て、茶道を好意的に受け入れさせていた。

「苦ッ...!?!」

甘い物は全般に好きなはるかだが、抹茶(まっちゃ)の苦みには慣れないでいる。

「はるかはお子様だねえ。」

そんなはるかの表情を見ると、決まって沙織はそう言ってからかう。その光景はまるで日曜夕方にテレビで観る寄席(よせ)番組のような雰囲気(ふんいき)を醸(かも)しだしていた。

しかし、この“お約束”も少しの間ご無沙汰(ぶさた)していた。それは、はるかの身辺(しんぺん)が騒(さわ)がしくなったせいで、沙織の誘いを何度か断っていたからである。騒がしくなったというのは、言うまでもなくソロモン王の秘宝を巡る戦いに巻き込まれたのを示唆(しさ)し、沙織も、先月はその渦中(かちゅう)にいたので茶会を欠席していたのである。

「いっつも同じ事を言うね、沙織は。」

「あははっ...でも、こうしてお茶会に一緒するのは久しぶりだよおー。」

「あっ...そうだね...うっ...!？」

「! どうかしたのお...？」

「...やっぱ苦いのニガテだ...。」

「やだーッ。もおービックリさせないでよ！アッハッハッハ...」

「うえー...なんかいつにも増して苦いような気がするう...。」

「だってコレ。」

「うん?...何ソレ？」

沙織が手にしていたのは、スーパーで普通に市販されている抹茶の小袋で、一人前分ずつ小分けされている物であった。その小袋は何故か封が空けられている。空いた口から匂いの残存(ざんぞん)がしたので抹茶であるのが分かり、はるかは「はっ」とした。

「あーッ！ソレ入れ足したのねッ!？」

「へへへへ...。」

はるかが苦いのが嫌いなものを知ってて、沙織は密かに回ってきた茶器に抹茶を加えていた。

「っもー！沙織ッ!!」

「わーい、引っ掛かったー♪」

周りの目を気にして、それ以上は怒れずにいるはるか。それまで見越して、罠(わな)にハマる強(したた)かさといタズラ心を沙織は兼(か)ね備えていて、はるかはこういう目に何度も遭(あ)わされていたのだが、見事に引っ掛かる為に、沙織はヤメられないでいた。

罠にハマる度に気の毒には思うのだが、頭が良くて美人で沙織にとって憧(あこが)れの存在である、はるかの違った部分が見たくて、ついついイジってしまう。沙織にとって完璧(かんぺき)に見えるはるか。その人間臭い部分を引き出して覗(のぞ)き見したいという願望(がんぼう)を、友人という立場を利用して行い、友情に甘えて少々の行き過ぎを許してもらっていた。

純真無垢(じゅんしんむく)なはるかのイタズラへの引っ掛かり具合は、あまりにもハマリ過ぎるので、色んなアイデアは浮かぶのだが、時に加減に悩む沙織であった。学生同士の気軽な茶会は一通り終わると座談会(ざだんかい)となり、楽しく会話をしている内に、気がつけば昼食の時間となっている。

ゆとり教育なる物は、子供とは言え競争社会に身を置く人間にとって、影の競争を煽(あお)り、増々、社会全体の生活に圧迫を与える悪法のように見受けられるが、はるかとは沙織の二人に関して言えば適用外のようなものであった。

昼食は沙織のお手製弁当を二人して開いた。料理好きでマメな性格も併(あわ)せ持つ沙織。ただの悪戯(いたずら)好きな女の子ではなく、はるかに似て心根の優しい面倒見のいい所がある。

「美味しいね！」

「よかったあ。」

「沙織のお弁当はいつも彩りがキレイだね。」

「はるかも料理作ろうよ！今度、私が教えてあげるからさあ。」

「私は...。」

母親の顔さえも知らないはるかは、料理だけは馴(な)じみがないので苦手であった。

「はるかだったらフライパンと包丁だけで料理が上手くなりそうなんだけどなあ。」

「えっ！？どうして？」

「だってえこの前の戦いで手から火を出してたでしょお。アレ使えたらガスコンロなしでおいしい料理ができそうだよおー。」

「コラッ！」

「へへへ...ゴメンなさい。」

はるかの分も弁当を作ったり、基本的にはとても優しい沙織だが、子悪魔的な一面も覗(のぞ)かせている。それは生来(せいらい)の内気(うちき)でシャイな人の内からくる照れ隠しなのだろうか。

「この服かわいくなあ？」

「うん、いいんじゃないかな。」

「ホントお？」

「うん、似あってると思うよ。」

「じゃー買うう。」

昼食を済ませると、近くのデパートに足を運んだ二人。最近でこそ少なくなはったが、はるか
と沙織は、週末をよくこのデパートで買い物に訪れていた。沙織が服を買う時は、決まってはる
かに意見を聞き、はるかの服は沙織が似合いそうなを選ぶ。

「はるかあー。」

「何？」

「下着欲しいって言ってたよねえ？」

「うん。それがどうかしたの？」

「コレなんかどう？」

「何これーッ！？スケスケじゃない。」

「こういう大人っぽいのを制服の下にいー...」

「着けるかッ！」

「じゃあコレわあー？」

「何でTバックなのよッ！」

「面白いかなあなんて...。」

「もー！ちゃんと選んでよッ。」

「分かったから怒らないー。」

「私、コレにする。」

「あっ！ソレいいよねえ。はるかに似合うと思ってたんだー。」

「なら最初からそう言ってよ！」

男性の目から見れば不可解(ふかかい)と思える程に、はるか
と沙織は買い物に長い時間を費やし、気がつけば外は薄暗くなりだしていた。二人は急いで家路につき、バス停を降りて別れると、はるかは夕食をとりに秀樹の元へと向かった。

「おっ、はるか！晩ごはん食べに来たのか？」

「うん。今日はなんか定食っぽいのが食べたいな...」

「ああ分かった。何か作るよ。」

秀樹自身がまかないとして作る料理を分けてもらい、それを二人で食べる事にした。

「あのさ...。」

「何だ？」

「正友と一緒にじゃなくて、お兄ちゃんと修業できないかな？」

「何かあったのか？」

「何て言ったらいいのか分かんないけど、正友といると心が乱れるんだ。」

「そう邪険(じゃけん)にしなくても...」

「ううん。毛嫌いとかじゃないんだけど、何か修業に集中できなくなるの。」

「昔からお前らはよくケンカしてたよな。」

はるかは朝の事を冷静に振り返り、ちょっと正友に対して言い過ぎたのではないかなと反省していた。そこが苦労人である、はるかの長所であった。同世代の子供達には見られない思慮深(しりよぶか)さ。まだ成長途上なので、感情の起伏(きふく)とバランスが取りきれてはいないが、理性的で立派な大人になろうと努力をしているのである。

だからと言って、自分の事となると昨日までを振り返ってみるのだが、自分の言動や行為(こうい)の何かが悪かったのかと考えてみるのだが、どうも答えが出ない。かと言って、自分が謝るといってもそれはそれで納得がいかない。

なら、せめて大事な決戦を前に、修業に集中しなければイケないんじゃないかといった責任感が、はるかの出した結論であり、今の言動であった。

「あと三日経ったら俺も二人の修業に加わる。だからそれまで我慢できないか？」

「お兄ちゃんがわたし達と？」

「ああ。ケルビム【戦投機】の話しは聞いただろ？」

「...うん。」

「アレの扱い方を、お前達に教えないとな。だからそれまで何とか合わしておけばいい。いいな？」

「...分かったわ。」

「実はな...」

秀樹は、はるかが来る前に正友と話しをしていて、朝の出来事を耳にしていた。今までの二人の“いがみあい”を見ていて思う所はあったが、今は見守っているだけにしようと考えていた。

しかし、ゆううつな顔をして相談を持ちかけてきたはるかの気持ちを考え、自分が一緒に修業に入るまで、我慢(がまん)できるようにしなければと話しを始めた。

双方(そうほう)の話聞いたうえで、今朝の出来事に関しては、はるかにも非はあるが、正友の普段の行動にも問題があると言い、お互いが協調するように、どちらも注意する事で数日は二人で頑張るって欲しいという事であった。

「うん...分かった。」

秀樹の話しを一通り聞いて、とりあえずそう言って頷(うなづ)くはるか。

「正友は言葉使いはなっていないが、本当は優しくていい奴なんだぞ。」

「ドコが？」

「ドコがって言われても...まあ色々だよ。」

「色々って何？」

「そりゃ〜お前、アイツは確かに短絡的で自分本位な人間にパッと見は見えるけどな。それはマイペースで鈍感(どんかん)なだけで、本当に困ってる時とかは、アイツなりに親身になって力になってくれたりもするってトコがあるのさ。形式とか常識に捉(とら)われない所があって、そこら辺が破天荒(はてんこう)な人間だというレッテルを貼られがちにさせるんだが。そんな周りの目すらも色眼鏡(いろめがね)だと否定する心の強さ。ソコが世間になく強い自立心とガッツのあらわれだと俺は感じて、そういう所を買ってる。」

「...。」

「だからそういう面では俺はアイツを認めてるんだ。まゆみと付きあう時だってアイツが...」

その話をしようとする、はるかが少し表情を曇らせてしまったので、秀樹は話題を変える事にした。

「はるか。」

「えっ...何？」

「とにかく今は修業を頑張れ！」

「うん...。」

「正友には俺からよく言っとく。聴勁と暗勁。それに内攻勁も覚えないとイケないんだから、あれこれと不満を言ってる時間はないんだぞ！」

「分かってる。」

正友が遅番の仕事を終えた早朝。はるかが約束の時間に修業場に行くと、先に来ていた正友が汗びっしょりで一人、フリスビーを投げていた。

「おはよ...。」

感情のシコリはあったがとりあえずは抑(おさ)え、朝の挨拶を始める事から、そのシコリを取ろうと試みるはるか。

「おっ、もうそんな時間か。おはようさん！」

そんなシコリなど正友には全くない感じであった。いつもの事とは言え、あっけらかんとした雰囲気(ふんいき)に、まじめなはるかは絡み辛そうにしていた。しかし暗くて気付くのが遅くなったが、修業で汗だくになった正友を見て、修業への熱心さを感じ、少し彼を見直していた。

「だいぶ内力(メキド)の使い方が上手くなったみたいね。」

「お一分かるかね！スツゲエ事になってんだぞお。」

「何がスゴいの？」

「ジャーン♪」

正友は自慢げに手から小鳥を出した。

「ソレがどうかしたの？」

「これはケルビムから作ったんだぜ。」

「...そうなんだ。」

「リアクション薄っ！コレはスゲエんだぜ。」

「だから何がスゴいのよ。」

「言葉が分かるんだよ。見てろよ...ゴニョゴニョ...」

正友が何か小鳥に向かって話しだすと、ほどなくしてコインを嘴(くちばし)へと渡し、コインを啜(くわ)えた小鳥はドコかへと飛んでいった。

「ドコに行ったの？あの小鳥...」

「へへへッ...まあ見てろよ。」

ほどなくして、小鳥がジュースを啜えて正友の所に戻ってきた。

「な、スゲーだろ！」

「うん、スゴいスゴい...。」

もの凄く投げやりな感じで、はるかは相槌(あいづち)を打った。

「チェッ...何だよ、もっと驚くかと思ったのによオ〜。」

「...だって、スゴいって言うからどんなにスゴいのかと思うじゃない。」

「...まあいいや。秀さんから聞いているよな？」

「えっ!？」

「暗勁とかの修業だよ。」

「ああ...うん。」

「まだ寝ぼけてんのかあ〜?...ほら、始めるゾ！」

朝の喧嘩を引きづっている、はるかとは打って変わり、いたって普通の正友。いつもの事なのだが、はるかはペースを乱されている。

自分とは全く違う個性と特異性。その意識が拒否反応として対立的感情となっている。そこに思春期特有の感情の乱高下(らんこうげ)が加わり、時に爆発するのだが、秀樹の言葉が脳裏(のうり)に焼きついていたはるかは、正友の言われるがままに修業を始めていた。

「お前、なんか今日は変だぞ。」

「えっ!？そんなコトは...。」

「具合でも悪いのか？」

「何でもないわよ。」

精神的に悩んでいるはるかに対し、その暗い表情から体調が悪いと勘違(かんちが)いした正友。

「どれどれ...。」

正友がそっとはるかの額に手を当てた。

「キャッ...!？」

急に正友の手が自分の額に触れた事に、はるかはビックリしたようだ。

「何、デカイ声出してんだよ。」

「急にアンタが触るからでしょ！」

「あ〜分かった。悪かったな...んじゃ勁の修業を始めるぞ。」

今日の正友はやけにサバサバしている。お互いに、いつもと微妙に違うスタンスに戸惑(とまど)いだしていた。

「正友。」

「何だよ？」

「あなた、お兄ちゃんに何か言われたの？」

「ああ。もうちょっとお前に気を遣えって言われたよ。」

「そう...。」

「お前の方こそ、秀さんから何か言われたのか？」

「仲良く協力しろって言われたわ。」

「そっか。んじゃ、仲良くやろうぜ。まずは暗勁からだが...」

子供みたいに言い争ってた二人が急に大人になってしまい、お互い戸惑っている。しばらくの間、静かに修業に打ち込んでる内に、そちらに集中して雑念は消えた。そうなると修業の進み具合にも拍車(はくしゃ)がかかり、どんどん捗(はかど)るのが痛快(つうかい)で、二人とも時を忘れてのめり込んだ。

正友の指導もだんだんノッてきて、教わる立場のはるかがそれに呼応(こおう)する。そんなコミュニケーションを取ってく内に、長々と話しあうよりも格段に密度濃い和合の時を得て、はるか

と正友の二人は、次第に打ち解けていった。

久しぶりの再会から、互いに成長し、ズレの生じていた接点がしこりとなっていたのが、共通の目標に努力した事が功(こう)を奏(な)し、気がつけば朝日が昇ろうとしていた。

「おっ、もうこんな時間か。」

「早いね。」

「ああ。それにしても案外早く勁を修得できたな。」

「そうだね。」

「これもひとえにオレ様の指導が良かったお陰だな。感謝しろよな！」

「何言ってるのよ。私のセンスが良かったからじゃない！」

「素直じゃねえなあ。お前、もっと正直で素直にならないと、いい恋できないぞ！」

「馬鹿じゃないの。」

これまでと変わらないような口ゲンカに見えたが、お互いの気心が知れた今、それは今までの物とは一線を画していた。

正友を忌(い)み嫌うのではなく、家族のように思った上での意識から出る罵倒(ばとう)の言葉は、内容に反して言葉尻や発音にさほど攻撃性はなかった。

「馬鹿とか言うな！...それよりも、なんか腹減ったなあ。」

「朝ご飯にしようか。」

「おーいいねえ。お前が作ってくれんの？」

「しょうがないわねえ...お兄ちゃんトコで作ってあげるわ。」

「おい本当かよ！ラッキー♪」

「どうせ毎日ロクな物食べてないんでしょ。修業に付き合ってくれたから、今日だけは作ってあげるわ。」

「ちえっ...今日だけかよ。」

「当たり前でしょ。まともな朝ご飯食べたかったら、早くお嫁さんもらいなさいよ。」

「あっ、いいコト思いついた！ケルビムを進化させて料理作らせばいいんだ。」

「何言ってんのよ！」

「いや、鮎吉師匠が何にでもできるって言ってたから、きっと出来るはずだ...もしかしたら人間っぽいものにも化けれるかも。そしたら...ムフフフ...」

「何よ！ヤラシイ顔して気持ち悪いわね。」

「よーし...頑張るゾ！」

「何を頑張るつもりなのよ！」

「決まってんだろ。ケルビムを操作する修業だよ。」

「仲間由紀恵そっくりにケルビムを変身させようとしてんでしょ？」

「ギクッ!?お前、なんで分かったん？あっ...そうか！お前聴勁使ったろ？」

「バーカ！顔にそう書いてんのよ。」

「え、ドコに書いてんの？」

正友が自分の顔を触りながら、はるかにそう尋ねた。

「ホントに馬鹿ね...言葉の例えじゃない。」

「あ、そうか!?!...ってだから何でオレの考えが分かったんだよ？」

「教えないよーだ。」

「教えてよ！」

正友の携帯の待受画面が仲間由紀恵になっているのを、はるかは知っていたので、鼻の下を伸ばした顔から簡単に考えている事を予測できていた。フザけ合ってる二人の前に鮎吉が現れた。

「修業の方はどうじゃ？」

「おじいちゃん!?!...一応言われた事はできるようになったわ。」

「ホホホホ。なかなかやるではないか。三日はかかるとっておったのにのオ。」

「いやーやっぱオレの指導が良かったからじゃないツスカね。」

褒(ほ)められる時が来たと思うと、決まってしゃしゃり出てくる正友。

「何言ってるのよ。」

飽きたという感じで正友を見るはるか。

「ホホホホ。まあ正友の言う事も一理(いちり)あるじゃろう。」

「でしょ！さすが鮎吉師匠は、はるかとは違って分かってらっしゃる。おい、今の聞いたか？はるか。」

「はいはい...。」

「何だよそのいい加減な返事は！大体お前なあ...」

「まあ正友、落ち着きなされ。」

鮎吉は次の修業をはるかとは正友に説明して、二人の意識をそちらに向かせた。勁と内力の変換。この二つの修業が思ったより早く済んだ事を受けて、ケルビムを乗りこなす実践的な訓練をするようにと指示した。

自分に合った武具をイメージし、それを搭載(とうさい)して実戦形式で、互いの武器や技を研究し、連携(れんけい)を深めるようにとも言った。つまりは、ケルビムは操縦者(そうじゅうしゃ)の力によってその性能を変える事ができるので、色々と模索(もさく)しろとの事であった。

その言葉を受け、二人は昼間はそれぞれの生活に戻り、その間に考えていた技や戦術を夜に試す事にした。色んなイメージトレーニングをしたはるか。夜更けはあつという間に訪れ、寝不足気味の彼女は欠伸(あくび)をしながら待ち合わせ場所へと向かった。

「遅えぞ！」

昨日に続き正友が既(すで)にそこに来ていて、欠伸をしながら来たはるかに、たるんでるぞと言わんばかりの声を張りあげた。

「まだ約束の時間前じゃない。」

「呑気(のんき)な事言ってねえで行くぞ。」

「何よそれー...。」

正友は実戦がしたくてウズウズしているようであった。不死鳥と竜を模(も)したケルビムに二人が乗り込むと、あつという間に空高く二体が飛び立った。

「くッ、ううう...」

体験した事のない重力による圧迫を受け、はるかは苦しそうであった。

(はるか！聞こえるか?)

「えっ!？」

正友の声が頭に響いた事により、遠のく意識が蘇生(そせい)した。パーピリオン星人と話した時のように、テレパシーを共有して話しかけているのかと思い、はるかは意識をそちらに向け、心で話をし始めた。

「はるか。大丈夫か？」

「うん、大丈夫。」

「...そうか。」

「スピードが凄いから負荷(ふか)も凄いね。」

「ああ。まずは飛行訓練をして、Gに慣れてから実戦だな。」

「そうね。」

最初の内は戸惑ったものの。はるかとは正友の二人がケルビムを使いこなすのに、そう時間はかからなかった。二人の意識がケルビムに馴染(なじ)んで行くと、まるでそれが自分の手足のように感じられた。

例えて言うなら、はるか達の体がそのまま大きくなったかのような一体感。ほどなくして実戦練習へと移ったが、ケルビムを動かすまでの数日間の修業の意味が、そこでさらにはっきりとした。

勁は意志伝達をスムーズに行う神経感覚器官を象徴し、内力は動力や武器といった物質を作り出して維持(いじ)する。聴勁は相手の攻撃を予測したり、パイロット同士の意思の疎通(そつう)をはかるといった具合にであった。

習うより慣れろといった感じで、二人は実戦を通してどんどんそれらを吸収していった。生身の人間同士なら、長時間の戦いや無茶(むちゃ)をするのにも限界があったが、そういう心配がいらないので、あれもこれもと思い立った事をその場で実行し、無駄のない効果的な攻撃を追求していった。

「おい、はるか。」

激しい撃ち合いの最中に正友がはるかに話しかけてきた。

「何よ。気が散るから話しかけないで！」

「コレ(ケルビム)よオ。接近戦も考えて変形した方が良くね？」

「どういう意味？」

「今は離れたトコから技を出しあってるけど、実際に戦うようになったら動き回るんだから人型になった方がいいんじゃないかと思ってさ。」

そう言うと、正友のケルビムがはるかに近づいてきた。休戦の合図もなかったので、はるかは狙いを定めてミサイルを撃ったが当らず、逆に正友の逆襲を受けた。

はるかは旋回してそれを躲(かわ)し、正友の居場所を確認しようとしたが、自分が予測していた場所に正友の機影(きえい)がないのを見て「はっ」とした。慌てて探すと、正友のケルビムは、さっきはるかのケルビムを狙った位置とほとんど変わらぬ場所において、飛行機のような形から人型に変形して、銃を手にはるかの方を狙いすましていた。

はるかが気付いたとほぼ同時に、正友のケルビムから弾丸が放たれ、旋回(せんかい)して回避(かいひ)しようとしたが間に合わなかった。

さきほどのミサイル攻撃を躲した時、旋回しながら正友のケルビムを行き越してしまった為、飛行形態では背後を取られると反応が遅れてしまったのである。

後方から迫りくる弾丸は正確で被弾(ひだん)を免(まぬが)れずにいた。変形する事により、しっかりと銃が固定され、格段に命中精度が上がったのが躲し切れなかった原因で、被弾の衝撃に頭がクラクラしながらも、はるかはその原因を知った事にショックを受けていた。

自分が見落としていた点に正友が気づき、すぐに欠点を修正した事に対して、彼を認める気持ちと共に自分の至(いた)らなさを知り、それを齒がゆく思ったのである。

はるか頭の中は悔しさや自分への叱責(しっせき)やらで真っ白になり、その為にケルビムが推進力(すいしんりょく)を失い、失速して急降下(きゅうこうか)をしだしていた。

「馬鹿ッ、ボーツとすんな！」

力なく墜落(ついらく)する、はるかケルビムごと正友が抱えて助け出した。自分と一心同体のようになったケルビム。機体ごしに抱えられた状態は、まるで実際に自分の体がお姫様抱っこをされたかのような錯覚(さっかく)をはるかにもたらした。

恥しさに抵抗したい気持ちと、正友の男らしさに触れ、ちょっとカッコイイと思った事に対して異性を意識した動揺(どうよう)とが入り混り。やがて心臓が張り裂けそうなほどに高鳴り覚え、ただただ茫然(ぼうぜん)とするばかりであった。

「...おい！ 気ィ失ってんのか？」

正友がはるかの元へ駆け寄り、大きな声でその様子を伺った。

「え？ ああ...助けてくれてありがと。」

「お、珍(めずら)しく素直じゃん。ぶっ続けで戦ってるからちょっと休もうか。」

「...うん。」

気を静めるために、はるかは正友の提案に同意した。

「お前、なんか変だぞ。頭でも打ったのか？」

地上に降りてくると、正友がオドけた風にそう言った。性格上、素直に言えなかった訳だが、彼なりに、はるかを労(いたわ)っているつもりであった。

形は違うが正友の見せる優しさはどこか秀樹と似ている所があって、意外な所でダブった面影(おもかげ)に、はるかは戸惑い、いつもならカチンと来るような言われ方をされたにも関わらず、何も言い返せないでいた。

「おい、ホントにどうしたんだ？」

「...いいえ、何でもないわ。お茶でも飲んで休憩しましょ。」

「あ～そうだな。なんか喉(のど)が渴(かわ)いたしな。」

しばらく休憩をとると、明け方まで実戦の修業は続いた。

はるかには正友と同じようにケルビムを人型に変形させ、戦闘機形態とそれを戦況(せんきょう)に応じて組み換えながら、より無駄のない動きを研究した。正友も同様にして戦っている。それはまるで巨大な竜騎士と鳥人が戦っているようなお伽話(ときばなし)の世界を空に展開していた。

「正友。」

「なんだ？」

「ケルビムの変型なんだけど、変形した姿から来るイメージに名前を付けて、それを変型の時に呼んだ方がスムーズに早く変型できるわ。」

「ほう、そりゃイイコト聞いたな。バトルボールやスピリットアームズを出す時と同じ要領(ようりょう)だな？」

激戦を繰り広げながらも、二人はそんな言葉のやりとりをできるまでになっていた。互いに戦術を研究しながら、工夫を重ねて得た情報を即座(そくざ)に教えあいつつ技を磨(みが)いている。

言葉が物質を作るバトルボラーの神技の秘訣(ひけつ)を拈(かく)大解釈(だいかいしゃく)した理論で、イメージから連想した名を特定の物質に付けて呼ぶ事によって、その状態をより早くイメージさせて具現化(ぐげんか)する。

例えるなら牛肉のステーキにステーキという呼び名を付けて、より早くステーキを作り出すといった感じで、イメージの具体化をより早める為の工夫を実験し、いい成果を収める事ができるとすぐ教えあう。そんな感じで、二人はメキメキと力を伸ばしていた。

「ちなみにお前はどんな名を付けたんだ？」

「飛行形態を“ドライブ”。それが人型に変形したら“ナイト”と名付けてイメージしてるわ。」

「そうか。オレもそのアイデアもらっとくわ。そんでよ、ケルビム自体には名前とか付けたんか？」

「え、付けてないけど...。」

「ほら映画とかでもよくあるじゃん。戦闘機に名前付けたりさ。コードネームつつうのかさ。そういうの付けて、それで呼び合おうぜ！」

映画やアニメによくある、自分愛用の戦闘機に固有名詞をつけて呼ぶシーンがやりたくて、正友が強引にはるかにもケルビムに愛称(あいしょう)でもいいから名前を付けろと言う。

はるかはケルビムの変形した姿に名詞をつけて、変形の過程に生ずる動作をより円滑(えんかつ)に進めるといった実用的な名付けを提案したのに、正友が自分の趣味を取り入れようとしたのは余りにもマイペースで横暴(おうぼう)な発想の押しつけにも思えたが。そもそもケルビムの形態変化は彼が考案(こうあん)したのであり、そういう柔軟(じゅうなん)な遊び心が、このような悪ふざけとも取られかねない事態(じたい)を招く誤解(ごかい)も生むが、その感性がいい発想への引き金になる事を知り、それを評価したはるかはあっさりと要求に従っていた。

「正友は何て名前にしたの？」

「“銀竜(ぎんりゅう)”ってのはどうかと思ってさ。銀は金銀財宝の銀っていう字に…」

「そんな説明はいいわよ。分かってるから。」

「何だよ…まあいいや、んではるかは何て付けるんだ？」

「あなた本当に和風好きよね。」

「オレの事はいいから。ほら何て付けんだよ？オレが考えてやろうか？んーとな…」

「じゃあレッドクラウンでいい。」

「早ッ!?もう考えたんか？そんで、ソレどういう意味なんだ？」

「別に…意味なんてないわよ。」

「何だよー。もっとヤル気出せよなー！」

「何だっっていいじゃない？」

「そりゃー何だっっていいんだけどよオ…。直訳すると“赤い栄冠(えいかん)”…か。悪くねえな。」

正友の遊び心に付き合ったはるか。遊び心に遊び心で返そうと、パッと思いつきで命名したのを述べたが、別に適当に取って付けたのではなく、自分の特色が出たケルビムからイメージする感じを言ったので、正友は意味合いを理解した時点でそう言って納得していた。

頭の柔らかさでは、はるかは正友に合わないかも知れないが、考えをまとめたりする回転の速さでは、正友ははるかに遠く及ばない。

そんな凸凹な二人が思い思いに試作し合って、力を伸ばし合っていた。わずか二晩の修業であったが、お互いに高め合った修業の成果にはるかは満足し、それを引き出せたのは正友の力も大いにあっての物であったので、彼の事を認めざるを得ずにいた。

尊敬(そんけい)とまでは行かないが、はるかの中で正友の印象は大変よくなっていた。それでも今までが今までなので、秀樹みたいにかしこまった態度も取れないなと思い、今のままで彼には接しようと思っていた。

この二日間で正友への誤解(ごかい)や偏見(へんけん)はなくなっていたが、彼の性格が分かったが故(ゆえ)に、あんまり敬々(うやうや)しくしても頭に乗るというか、正友に敬語を使ったりするのが、はるかの中では不自然にも思えた。正友のキャラ的にもなじまないし、小さな時からずっとタメ口だったので言い辛いというのもあったからである。なので表面上は数日前までと何ら変わりはなかったが、はるかの心の中ではガラリと正友に対する扱いが変わっていた。

一翌日。

パーピリオン星人との決戦まで一週間を切った。その夜、秀樹もようやく合流し、三人揃っての最終段階の修業が始まっていた。

「お兄ちゃん、この数日間は何かあったの？」

ケルビムに搭乗(とうじょう)しての修業に最初から合流しなかったのを不思議に思ったはるかが、秀樹にそう言って疑問を投げかけた。

「お前達仲良くしてたか？」

秀樹ははるかの問いかけには答えず、そう逆質問をしていた。

「えっ!?...うん、まあ...。」

「そうか、ならいいんだ。早速だが修業の成果を見せてもらおうか！」

はるかの言葉を聴き、秀樹は安心した様子であった。

しかし、それも束(つか)の間(ま)、さっさと話題を切り返す。まるで何かを確かめるかのような口ぶり。

その様子を見て。もしかすると、用事があった秀樹は修行に加わらなかったのではなく、正友と自分の親睦(しんぼく)をはかるために席を外していたのではないかと、はるかは感じていた。

秀樹は、二人がどの程度の域に達したのか知りたいと言い。正友とはるかに二人がかりでかかってくるように呼びかけた。

「秀さん、冗談キツイぜ！オレら二人がかりでいったら、ひとたまりもないだろ？」

「いいからかかって来い。」

やめておいた方がいいと正友は忠告したが、秀樹は一向に意に介さない。

「...んじゃ行くぜ。はるかッ！！」

「本気で行くわよ！お兄ちゃん。」

一斉に空へと飛び立つと、はるかとは正友は秀樹めがけて全速力で一気に翔けた。

「ステルスドライブ（空隠疾走）！！」

そう言うと、銀竜が忽然(こつぜん)と姿を消し、秀樹のケルビムの背後に回った。レッドクラウンは途中まで銀竜と並走(へいそう)していたが、銀竜が姿を消した地点で変形して踏み止まり、中距離から秀樹を的に銃を連射した。

上空には薄い雲の群れが柵(たな)びいてきていた。秀樹のケルビムはかなりの巨体であったが、蒸気のように漂(ただよ)う雲(くも)が丸呑(まるの)みにし、そこをレッドクラウンが放った弾丸が突き破っていった。

しかし、秀樹のケルビムへと吸い込まれるように飛んでいった弾丸が、被弾した手応えを感じられないでいたのが、はるかは不思議でならなかった。「おかしい」という思いが確信へと変わったのは、正友の慌てる声が、はるかに届いたからであった。

「もらっ...何ッ!?!」

被弾を目前にして、秀樹のケルビムが薄雲に同化するようにして実体を無くすと、弾丸は幽霊(ゆうれい)のように透きとおった虚(うつ)ろな秀樹のケルビムのボディをそのまま通過し、背後にいる銀竜を襲ってしまっていた。

いきなりの修羅場(しゅらば)に、正友はどうする事もできず、銀竜は数多の被弾を余儀(よぎ)なくされていた。

「そんな...。」

信じられないといった感じで思わずそう呟(つぶや)いたのはるか。しかし、すぐに頭を切り換え、秀樹のいる場所を探した。聴勁を駆使して秀樹の居場所を突き止めたのはるか。

「そこよっ!!」

レッドクラウンがドライブ(飛行形態)に変形して、秀樹のケルビムの後を追った。スピードで勝るレッドクラウンが、射程距離(しゃていきより)に秀樹のケルビムの影を捉(とら)えたので、旋回(せんかい)しながら両翼(りょうよく)の銃火器(じゅうかき)を発射すると、無数の弾丸が竜巻(たつまき)のような螺旋運動(らせんうんどう)をして、秀樹のケルビムの影を打ち抜いたかと思ったのだが...

「え!?!...いない。」

またも弾丸は秀樹のケルビムの影をすり抜けていった。不安と焦(あせ)りと戸惑(とまどい)いが錯綜(さくそう)してレッドクラウンの動きが止まると、頭上へと秀樹のケルビムがいつの間にか来ていて、ガラ空きのレッドクラウンの機体上部を狙っていた。

「させるかッ!スカイティッパー(鱗勁刃)!!」

被弾のダメージから回復した銀竜が、両腕から刃を出し、レッドクラウンへの攻撃を阻止しようとして全速力でやってきた。

「ウィンドブレイク(烈風斬)!!」

ドライブで急加速し、直前でナイト(人型)になって切りかかると、加速の勢いで唸(うな)り上げるスカイティッパーは秀樹のケルビムを切り裂いたかに思えた。

「な、これも...幻影(げんえい)...?」

「チェックメイトだ。」

秀樹はそう言って、はるかと正友のケルビムの足元から数十メートル下の地点から、ケルビムに巨大なバズーカを構えさせ静止していた。

「ありゃー...こりゃ、ヤられたな。」

正友はあっさりと負けを認めた。

「どうやって身を隠したの？」

負けたのが信じられないと言った感じで、はるかが秀樹にそう質問をした。

「ティバイデットファントム（水分身）。霧(きり)みたいな雲が沸(わ)いてきただろ？水蒸気のプリズム、その乱反射(らんはんしゃ)が俺のラグナクエスト（水竜神戦投機）の幻影(げんえい)を作った。それだけの話だ。」

「スゲー...さすが秀さんだ。ところでラグナクエストつけたけな。ソレって秀さんのケルビムの名前なん？」

「ああ。お前らの思念(しねん)からソレっぽいのが聞こえたから、俺も名前を付けてみた。」

「心を読まれてたんだ、わたし達...。」

「そういう事だな。二人とも隙(すき)だらけだったぞ！それとな、地上での戦いと違って空中戦は広いし、上下左右を高速で走り回るから、ドコから攻撃されるかも分からない。そこら辺にも気を配らないとな。分かったな！」

「はいよ。」

「うん...分かった。」

「じゃあ修業再開だ。」

秀樹も加えての修業は、ケルビムを扱えるようになって有頂天(うちょうてん)になっていた正友とはるかの気を引き締めていた。二人は更に高みを目指す事を強(し)いられ、細部(さいぶ)に至る注意力や素早い判断力といった、闘法の初歩から鍛(きた)え直す必要に迫られていた。

自らの五体を用いての普段の戦いと、ケルビムを動かしてのものとは、やはり誤差(ごさ)があるようであった。その盲点(もうてん)をステップアップしていく修業の段階ごとに秀樹は指摘していった。本人達の元々の武術が優れている為、修正点は多くあったものの、数日の修業でもって二人は課題をクリアし、ケルビムを見事に操縦できる術を会得(えとく)することに成功していた。

「よし、基礎はこれで完ぺきだな。後はそれぞれの技を研ぐことと、俺達の連携技を考えよう。」

「うっひょー。ソレ、楽しそうだな。よーし頑張ろうぜ！」

派手好きの正友は秀樹の言葉に嬉しそうにしていた。

「それで、どんな技やんの？」

「まあそう慌(あわ)てるな。物事には順序がある、まずは二人組でのコンビネーション。俺達が二人ずつ組んだら何パターンかの組み合わせが出来るだろ？」

「うん、そうだな。」

「その修練から始めよう。俺達の技の属性(ぞくせい)と相性(あいしょう)から考えられる、理想的攻撃。それが出来たら三人でと言う事になる。」

「ふーん...なるほど。」

「それぞれの組み合わせに応じて、技のバリエーションを考えてきた。」

秀樹は数十枚の紙に自分の案をまとめた物を、はるか正友に見せた。

「へえ～秀さん、びっしり書いてんな。」

紙には技の理論や用途等がびっしりと書かれていて、所狭(ところせま)しと並ぶ文字列を見て、正友は目眩(めまい)を起こしているような顔をした。

「こりゃ...大変だな...。」

「ハハハ。正友はあんまり理屈(りくつ)は苦手だろうから、実戦で教えるよ。はるかは目を通すだけで理解できるかな？」

「...うん。お兄ちゃん。」

「なんだ？」

「わたし達が二人で修業してる間、コレを書いていたの？」

「ああ...と言っても、俺は理論的な面や戦術としての応用を想定した内容を書いただけで、技自体は元々あった物だ。」

「その技は誰から習ったの？」

「話すと長いんだけどな...まあはしょって言うけど、一言で言えば師匠から俺が習った。」

「そうなんだ。おじいちゃんも昔、ケルビムを操って戦ってたのね。」

「ああ。厳密(げんみつ)に言えば、お前と正友の先輩にあたる人物と俺が習った技だ。鮎吉師匠の指導でな。」

「“女帝”と...？」

「...まあな。」

そこに話が及ぶと秀樹の滑舌(かつぜつ)は悪くなる。はるかはその以上踏み込んだ話ができないでいた。秀樹は何事も無かったかのように取り澄まして話を進めた。

「三人の融合奥義はスゴいぞ。」

「どんな技なんだ？」

その話を聞き、正友がそう言って目を輝かせた。

「“コスモクライシス・メノラバスター”この技の破壊力は凄まじいぞ。俺達三人だからこそできる技だ。それぞれの特性を生かし、それを何倍にもする奥義だ。」

「へえ～...スゲエな。でも、ソレって鮎吉師匠が考えたネーミングなん？」

「いや、師匠のネーミングはパツとしないから、名前だけは俺が直した。」

「だろうな。」

「だが、技そのものは師匠が受け継いできたものだ。この威力は凄いからな。この技の力をフルに発揮(はつき)するには、自分の特性を修練する必要がある。お前達の出来次第ということだから頑張ってくれよ！」

「よーし！頑張るぞ～。」

「お兄ちゃんはやっぱ凄いね。私も頑張る！」

「別に俺は凄くないよ。はるか達よりちょっと先輩ってだけだ。もう1つ奥義があつてこれも凄まじいんだが、追々に説明することにして。さあ、決戦は近いから気合いを入れて修業だ！」

はるかとは正友には言わないでいたが、三日の間、秀樹がはるか達の修業に参加しなかったのは、他にも理由があった。自分が姿を見せない事で、はるかとは正友は否(いや)が応(おう)でも協力しなければならぬ状況を作れば、自然と感情のわだかまりも取れると踏んだのである。

一連の二人の話を聞いた上で、何事も一石(いっせき)二鳥(にちょう)を考える秀樹らしい思慮深(しりよぶか)さからの行動。その思惑(おもわく)通りに事は運んだ。さらにもう一つ考えていた事があって、パーピリオン星人と”女帝”との関係につき、秀樹には不可解な点があって、それについても独自の考えを打ち出していたのである。

一石二鳥どころか、同時に幾(いく)つもの事を考えながら、合理的な段取りと根回しを秀樹はしていたのである。刻々(こっこく)と変化する状況に柔軟(じゅうなん)に適応する思考と緻密(ちみつ)な計画力は、師である鮎吉も認める所で。秀樹がいれば勝利は間違いないと、安心して地球の運命を託(たく)せると思っていて任せきっていたので、師匠として出る幕はないでいた。

秀樹という優能な指揮官を得て、残りの数日をより深く内容の濃い修業に、急成長を遂げたはるか正友。二人だけで有頂天になっていた時とは違い、今度は本物の実力を得て、満(まん)を持(じ)して決戦当日の朝を迎えていた。

～次章へつづく～

バトルボーラーはるか
第二集 星間戦争

第3章・ケルビム

<http://p.booklog.jp/book/59343>

著者：Ψ (Eternity Flame) 英 樹(はなぶさ いつき)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>

ブログ：<http://profile.ameba.jp/jjmm123/>

編集：Ψ (Eternity Flame) 秋乃空(あきのそら)

ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントか上記の秋乃空のブログへお願いします

<http://p.booklog.jp/book/59343>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/59343>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ